

水 稻 新 品 種 「は な ゆ た か」 の 栽 培 指 標

武田 正宏・芳賀 静雄*・結城 和博**・富樫 一幸***

(山形県立農業試験場・*山形県立農業試験場置賜分場・**山形
県立農業試験場最北支場・***山形県立農業試験場庄内支場)

Cultural Practices of New Rice Variety "Hanayutaka"

Masahiro TAKEDA, Sizuho HAGA* Kazuhiro YUKI** and Kazuyuki TOGASHI***
(Yamagata Prefectural Agricultural Experiment Station・*Okitama Branch,
Yamagata Prefectural Agricultural Experiment Station・**Saihoku Branch,
Yamagata Prefectural Agricultural Experiment Station・***Shōnai Branch,
Yamagata Prefectural Agricultural Experiment Station)

1 は じ め に

中晩生の良質、多収性の新品種「はなゆたか」¹⁾は、昭和58年3月、山形県の奨励品種に採用されたので、本品種の栽培指標を確立して普及に資するため、山形県立農業試験場では、本・支・分場の連絡試験を実施した。その結果、収量別に構成、決定要素及び生育指標など栽培指標を明らかにしたので報告する。

2 試 験 方 法

各場所ともに整粒歩合80%以上で、目標収量を設定して試験を実施した。試験区の構成は、窒素の基肥量を2～3段階とし、それに追肥の時期及び量をかけた窒素施肥法試験を主とし、更に栽植密度及び植込本数を組合せ計12～16区であった。

供試苗は、山形農試本場、庄内支場及び置賜分場は稚苗であるが最北支場は中苗であった。

3 試験結果及び考察

(1) 構成要素及び決定要素について

収量70 kg/a以上を得るための粗数は図1に示すように43千粒とみられる。また、同様に穂数は図2で示すように、山形、置賜においては570～580本/m²必要である。

収量65 kg/a以上の最北の中苗では、粗数41千粒で穂数

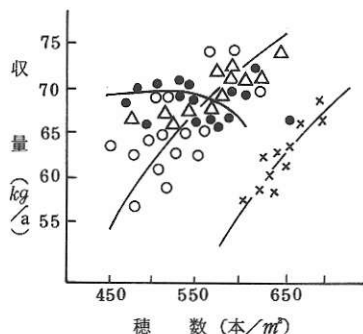


図2 穂数と収量

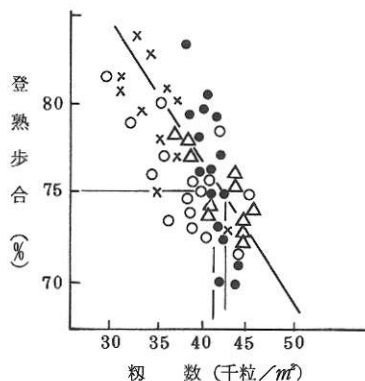


図3 粗数と登熟歩合

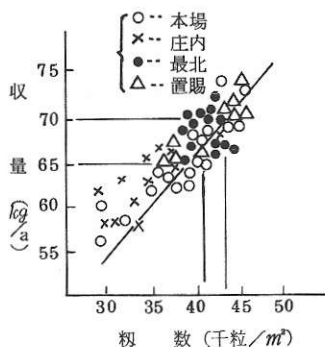


図1 粗数と収量

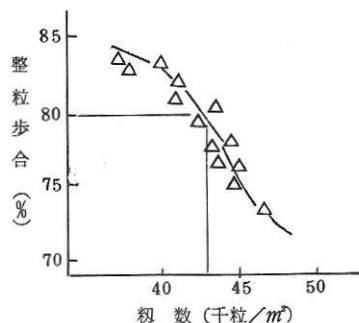


図4 粗数と整粒歩合(置賜)

500~550本/m²であった。穂数の多い庄内は670本/m²であった。

登熟歩合は、籾数が多くなるに伴い低下するが「はなゆたか」の場合、これが75%以上を示すのはm²当たり43千粒であるが最北支場で41千粒であった。

整粒歩合は、図4に示すように、籾数が多くなるにしたがって低下するが目標の80%以上を確保するのは、43千粒である。

以上の結果から収量70kg/a以上、整粒歩合80%を目標とした栽培指標(稚苗)は表1のとおりである。また、収量65kg/a以上、整粒歩合80%とする最北地方の中苗は表2のとおりであった。

表1 収量70kg/a玄米整粒歩合80%を目標とした栽培指標 (村山、置賜地域 稚苗)

穂数 (本/m ²)	一穂もみ数 (粒)	m ² 当りもみ数 (粒)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)	倒伏程度
570~580	73~75	43,000	75%以上	22.0	2以内

表2 収量65kg/a玄米整粒歩合80%を目標とした栽培指標 (最北地域 中苗)

穂数 (本/m ²)	一穂もみ数 (粒)	m ² 当りもみ数 (粒)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)	倒伏程度
550	75	41,000	75%以上	22.0	2以内

(2) 生育指標について

稈長は、図5に示すとおり穂数570~580本/m²の場合、稈長80~82cm以上になると倒伏程度2以上となるので、80cm程度を目標とする。

次に、図6に示すとおり、穂数570~580本/m²を確保するには、最高分けつ期の茎数を790本/m²、6月20日(7葉期)の茎数を450~480本/m²とする。また、この目標値を得るための基肥窒素量は図7より、0.5kg/a + 活着期0.2kg/aと推定される。また、その後の追肥は、幼形期0.2kg/aと穂ばらみ期以降生育状況を見て対応する。

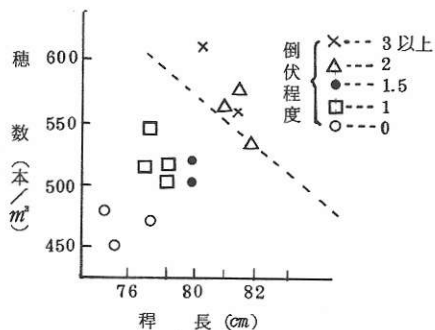


図5 稈長と穂数の関係と倒伏程度 (山形、置賜)

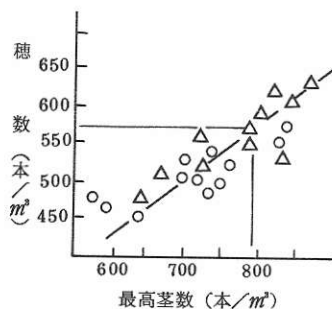


図6 最高茎数と穂数 (山形、置賜)

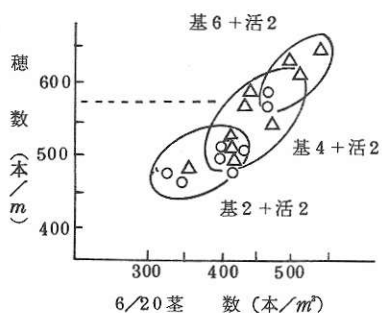


図7 6月20日茎数と穂数の関係と基肥 (山形、置賜)

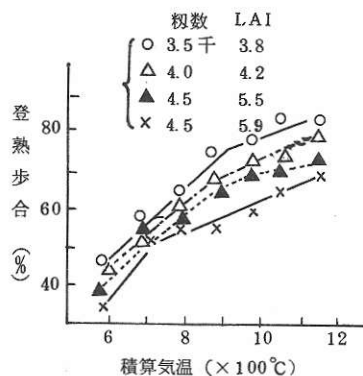


図8 籾数別登熟特性 (山形)

なお、この品種は、葉色が淡く経過するので追肥過多にならないよう注意する。また、過剰生育になると図8に示すように登熟が緩慢となるほか登熟歩合が低下する。

引用文献

- 1) 後藤清三他. 1984. 水稻新品種「はなゆたか」の育成. 山形農試研報 18; 1-30.